

# 大魔王のお笑い神話



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン (E-mail : daimao@travelmitra.jp)

ぼん子画

(570-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3マツイ・ビル 201 TEL : 06-6354-3011

お笑いエッセイのメール発信をご希望の方は、ご連絡下さい。(E-mail : daimao@travelmitra.jp)

## 「孫悟空が生まれた国」⑦

流花賓館をチェック・アウトして広州駅にむかった。そこから空港までリムジン・バスが出ていた。今でこそ豪華な空港になっているが、当時は小規模な建物であった。空港内に入ると、香港からの車中で仲良くなった香港人姉弟に再び出会った。昨日の友は今日の友というわけではないが、親しみが込み上げてきた。その弟君がやけに親しく話している男性がいた。あまりにも親しそうなので、てっきり旧知の仲かと思ったら、たった今空港内で知り合ったばかりであった。

彼は桂林に行く予定だが、中国語ができない。漢字も読めない。それで、英語のできる弟君にぶらさがっていたのである。ところが姉弟は桂林には行かない。それで桂林に飛ぶわが輩と同行するように、弟君が勧めてきた。もちろん、旅は道連れ世は情け、ご一緒しましょう。

そのときは、この青年が、やがて“おじゃま虫”君になるとは思わなかった。

“おじゃま虫”君の正体は、ベルギー人で名前はジーン君 (Jean-Marc Maria) といい、PNUD (国連開発計画) の職員としてセネガルで働いている。とにかく好感度抜群の人懐っこいハンサムな青年であった。

広州から桂林間の航空機は、ソ連製の中古のような機材であった。

「このオンボロ飛行機なら墜落するんじゃないの？」

などとジーン君が言い始めた。そういえば墜落事故の記事があったような記憶がある。乗客は三分の二程度で、日本人も9名乗っていた。我らは後部座席に座った。

離陸すると、共用収容棚 (Overhead Bins) あたりから白い煙のようなものが吹き出てきた。

「あれは何だ！」

ジーン君が不安になり叫んだ。離陸する前は暑かったが、飛び始めると急に冷房が動き始め、温度差で水蒸気が発生したのである。それをジーン君に伝えると、

「Mr. 大魔王、本当かい？」

と言って、立ち上がり煙に手を近づけ確認した。納得して不安が収まった。霧の写真を撮っていた乗客もいた。

ところで、機内で一番ハンサムな人物は誰か。ジーン君か又はわが輩か。答えを示すこともなく、可愛いキャビン・アテンダントがジーン君の近くに集まり始めた。あの頃わが輩も

若かったが、ジーン君には敵わない。わが輩は完敗であった。

ところが、次第にわが輩の周りに集まり始めたのである。当時のキャビン・アテンダントは英語ができなかった。それでジーン君と会話が成り立たなかった。プロマイドを眺めていると飽きてしまうようなものだ。わが輩の勝利だ。

キャビン・アテンダントは林さん（21歳）と李さん（19歳）で、化粧気もなく素朴な美人であった。

ところで、何故わが輩がモテ始めたのか、それは片言の中国語と筆談ができたからである。中国語は旅行会話帳をもっていたこと、筆談は中国哲学を少しかじっていたことが役にたった。一時『莊子』に熱中していた。

もちろん、簡単なコミュニケーションしか出来なかったが、ジーン君には頼もしい男に思えたのであろう。いや、思った。

（この日本人に、ついて行こう！）

それはわが輩にとって、ジーン君が“おじゃま虫”になった瞬間であった。

「桂林空港にまもなく着陸致します」

機内アナウンスがあったが、林嬢と李嬢はまだわが輩から離れなかった。さすがに機体が傾きはじめたとき、あわてて前方に走り去った。その瞬間に誰も座っていない背もたれがバタバタと倒れたのには驚いた。

『莊子』に対するものは『論語』である。別のことばでいえば、自然（無為）VS 道徳（中庸）である。さて、どちらの生き方を選ぶかは、読者におまかせするとして、最近話題になったのは那覇市の「孔子廟」（孔子を祭る久米至聖廟）である。政教分離に反して、土地使用料を全額免除していたことが問題になった。そもそも儒教が宗教かどうか意見の分かれるところである。「孔子廟」が文化施設なら問題なかった。

孔子の教えに従って「徳」を積む行為は賞賛に値する。これはインド哲学でも同じことである。（じゃ、何が問題なの？）

米国では「孔子学院」なるものを造って、中国のスパイ活動の拠点にしていたと言われている。そもそも中国共産党が孔子の「中庸」を好むとは思えない。中庸とは右と左があれば、その真ん中をとることではない。どちらにも偏らないでバランスをとることである。そのためには、右も左も存在しなければならない。香港民主派の存在を消し去ることは、すでに「中庸」ではない。

この裁判は「中国に反発する市民運動家の女性」が政教分離に反すると訴えた。（朝日2021-02-21）中国思想云々というよりは国際政治の問題であった。中国共産党が領土を奪う前に、先祖供養を盾に沖縄を侵食しようとしている、と危惧したのである。

沖縄はチャンプルー文化だと言われている。チャンプルーは「混ぜこぜにしたもの」の意味である。ちなみに、わが輩はゴーヤー（ニガウリ）・チャンプルーが好きだ。ついでに言う、インドのニガウリ・カレーも好きだ。いずれも、混ぜることによって旨味が増す。

チャンプルー料理は、人の共存共栄の象徴だ。北京辺りで贅沢な北京ダックを食べていると病になる。孔子さまも言ったではないか「北京ダックは、いやしくも食すべからず！」と。（知らんけど）